

これは買い!?
気になる新製品をいち早くテストする!

New Products Review

今号から始まったこのNew Products Reviewでは、インターネット関連の話題の新製品を実際にテストし、読者の皆さんが購入を考えると気になるパフォーマンスや使い勝手についてレビューしていく。ぜひ購入の際の参考にしてほしい。



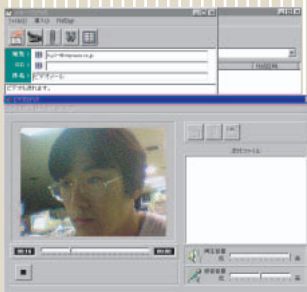
PCカード一体型がうれしいPIAFS対応PHS
PALDIO 321S

OCNエコノミー、PIAFSに正式対応したソニー初のTA
STA-128DSU



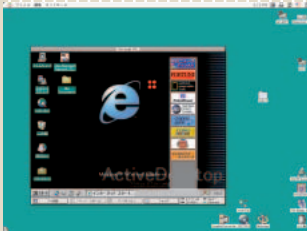
10Base-T端子を4つ搭載したダイヤルアップルーター
NetVehicle EX-3

モバイルギアにウィンドウズCEタイプ登場
Mobile Gear (MC-CS12)

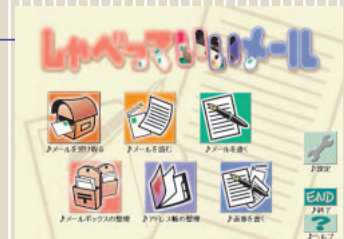


動画を送れる「電子メール送信ソフト」
Video Mail

声で入力&操作できるメールソフト
しゃべっていいメール



マッキントッシュでウィンドウズが動く!
VIRTUAL PC



PCカード一体型がうれしいPIAFS対応PHS

PALDIO 321S

Check!

PIAFSとV.42bis圧縮で高速通信
電話としても充実した機能

「こんなPHSが欲しかった！」そんな声が聞こえてきそうな、PIAFS対応のPHS「PALDIO 321S」が発売された。PCカード一体型で扱いやすく、PHSデータ通信の決定版と言えそうだ。

一体型が使いやすい

PALDIO 321Sは、折りたためるフリップ部分のカバーをはずしてPCカードスロットにさせば即通信できるという手軽さ。これまでは、電話機、ケーブル、本体を別々に持ち歩かなければならなかったが、これからはこのPHS本体だけでOKだ。

充実の電話機能

PHS電話機としての性能もまったく問題ない。稼働時間は待ち受け550時間、連続通話6時間と十分。重さは140gで、最近の80gくらいしかないIPHSに比べれば重めだが、これとてカード+ケーブルの重さも勘案すれば互角だ。片手でも操作はカンタンだし、パイプレーター機能も付いてPHSとしても十分に満足できる。

FAXにも対応

データ通信機能では、PIAFSの弱点と言われているFAX送信機能を新たに追加し、FAX通信ソフト「信乃助 for NTT Personal」を添付した(タイプAのみ)。これまで、FAX通信を利用するにはDDIのDATAが便利だったが、これでFAXを使いたいモバイルユーザーも安心してPIAFSを選べるだろう。また、従来のデータカードはウィンドウズ95と一部のPDAにしか対応していなかったが、PALDIO 321SではウィンドウズCE、Mac OS 7.6以上にも正式対応した。肝心の接続先、各プロバイダーのPIAFS対応もここにきて着実に進んでおり、PIAFSの魅力はますますふくらんでいく。

試用レポート

①FTPによるファイル転送テスト

今回、PIAFSのデータ通信の実力を正確に検証するために、FTPによるファイル転送速度を計測した。用意したファイルは、圧縮されたバイナリーファイルとテキストファイルの2つで、どちらもちょうど500Kバイト。バイナリーファイルはLHAなどを使ってもうも圧縮できない状態で、テキストファイルのほうは40%くらいまで圧縮できるファイルだ。FTPでデータ転送する相手は、PIAFS対応アクセスポイントが設置されたばかりのリムネットの筆者のホームディレクトリー。転送は都合5回繰り返し、その平均値をとった。また、比較のために、DATA、28.8Kモデム、TAでも同様のテストを行った。

②PIAFSの実力

結果が下のグラフだ。テキストファイルを転送したときの転送速度が5.57Kバイト/秒と速く、ビットレートにすると約45KbpsでPIAFSの実効伝送速度29.2Kbpsを上回っている。これは、アクセスポイントにV.42bisに対応した機材が使われているからで、テキストファイルのように圧縮が可能なデータは今回の実験では約1.5倍の圧縮効果が現れた。この圧縮効果はPTE経由でアナログのアクセスポイントに接続したときにも有効だ。ここで言えるのは、少なくともアナログ28.8KモデムやDATAに比べて、PIAFSのほうが転送速度に関しては優れているということだ。ただ、実際にインターネットで扱われる画像ファイルなどは圧縮効果が期待できないものが多く、実感ではDATAとPIAFSの違いがあまり感じられなかったのも事実ではある。

③総合点は高い

PIAFSの高いデータ転送能力、PHSとしての使い勝手、複数のOSへの対応など、総合的なバランスに優れたPALDIO 321Sは、モバ

発売元	NTT中央パーソナル
価格	タイプA 49,800円 (FAX機能付き) タイプB 47,800円
問い合わせ	0120-898956
付属品	充電器、電池パック、充電器用電源アダプター

URL <http://www.nttphs.co.jp/>



これからPHS購入を考えているモバイル予備軍にはおすすめの手軽さだ。



折りたたみ部分のカバーを外せばPCMCIAカードスロットに差し込むことができる。

FTPによるファイル転送速度 (Kバイト/秒)

	テキストファイル	バイナリーファイル
PALDIO 321S	5.57K	
PIAFS		2.97K
PTE 経由	5.64K	3.14K
DDI DATA	3.05K	
32Kbps		3.02K
HUCOM V.34ES2	4.62K	
アナログ28.8Kbps		2.36K
Aterm IT55	6.68K	
ISDN64Kbps		6.61K

ルユーザーには見逃せない逸品だ。新たに購入するユーザーはもちろん、乗り換えもおすすめしたい。私事だが、このレポートを機にさっそく購入。乗り換えた。

(梅垣まさひろ)

OCN、PIAFS に正式対応したソニー初のTA

STA-128DSU

Check!

OCNエコノミー、PIAFSに正式対応
多機能なアナログポートを3つ搭載
液晶モニター、USB端子が欲しい

発売元	ソニー株式会社
価格	46,800円
問い合わせ	03-5448-3311
付属品	CD-ROM、ISDNケーブル、RS232Cケーブル、PC98変換アダプター、マッキントッシュ変換ケーブル

URL <http://www.sony.co.jp/ProductsPark/Consumer/Peripheral/STA-128DSU/>



34(幅) × 163(高さ) × 212(奥行き)ミリとスリムなボディ。



背面
上からS/T端子、極性反転スイッチ、ISDNポート1つ、アナログポート3つ、RS-232Cポート、アース端子。

ついにソニーからターミナルアダプター(TA)が発売された。モデムの世界では、メモリー内蔵など独自の強いユニークな製品を世に送り出し、根強い人気を持つソニーブランドから発売されたTAは、好評のMN128/V3-DSU(NTT-TE東京から発売)の開発元であるピー・ユー・ジーが開発したファームを採用し、BACP対応の128K通信機能、PIAFS対応、DSU内蔵、アナログ3ポート、停電対策など、TAに求められるあらゆる機能を網羅したTAだ。

TAのテクノロジーを集結

この1年、TAは次々と新しい機能を取り入れて目覚ましい進歩を遂げてきた。新機種をテストするたびに、より性能が向上し、これまでになかった新しい機能が追加されているといった具合だった。このSTA-

128DSUでは、これまで筆者が誌面でたびたび指摘してきた、停電対策の必要性やアナログポートが2つでは足りないといった、既存のTAに対する苦言もほとんど解決されている。

インターネットからイントラネットまで

通信機能から見ると、最近のTAでは標準となってきたBOD機能が搭載されている。BOD(Bandwidth On Demand)機能というのは、データの転送状況などによって1B(Bチャンネル×1=64Kbps)と2B(Bチャンネル×2=128Kbps)を自動的に切り替える機能で、データ量に応じたスムーズな通信が行えるうえに通信料金も抑えることが可能だ。しかもSTA-128DSUはBACPというプロトコルにも対応している。このBACPは事実上の業界標準として

普及しはじめており、今後のTAでは標準的にサポートすることになると思われる規格だ。さらに、STA-128DSUでは、2Bでの通信中に電話をかけるなどの必要が生じたときに自動的に回線を明け渡す「リソースBOD」機能と、転送データの増減などの必要に応じて回線を増減する「スループットBOD」の機能をともに備えている。

一方、イントラネットにおいては、PIAFS対応が俄然生きてくる。会社のネットワークでこのSTA-128DSUをダイヤルアップサーバーとして用意しておけば、PIAFS対応のPHSを使って出張先や出先から会社のネットワークに安全に接続し、必要なデータにアクセスできる。もちろん、ウィンドウズNT用の設定ファイルも付いてくるから、NTのRASで使う場合も簡単だ。また、OCNエコノミーに正式に対応している点も新しい。SOHO利用者で将来的にOCNエコノミーを導入予定の場合でもそのまま使うことが可能だ。このように、ホームユースのインターネットからビジネスまで、STA-128DSUの守備範囲はかなり広い。

アナログは充実の3ポート

アナログポートは、NECのAtermシリーズと同様に3ポートが用意された。現在の電話の利用形態から考えて、3ポートというのは妥当な数であろう。「電話×1、FAX×1、モデム×1」、あるいは「電話×2、モデム(あるいはFAX)×1」という利用法ができるようになるが、Atermとは異なりポート2と3は内部的には共通になっているようで、この2つは同時には使えない、内線通話ができない、ダイヤルイン番号が共通などの制約があるが、うまく使い分ければあまり問題にはならないだろう。もちろん、フレックスホンへの対応や疑似コールウェイティング、内線転送などのアナログ機能は一通り用意されているので問題なし。パソコン

を使わずに、アナログ電話機から各種の設定ができる点も良い。

ソニーらしいデザイン

MN128-V3と同等のスペックを持つSTA-128DSUではあるが、そのデザインにはソニーらしいスマートさがうかがえる。本体には放熱用の穴とスリットがあり、丸みを帯びたデザインはシンプルだ。また、MN128-V3に比べてかなり小さいのもうれしい点だ。底面には停電対策の電池（アルカリ単3電池×6）を収める電池ボックスがある。この電池で、通話なら2時間、待ち受けだけなら3時間バックアップすることができる。

試用レポート

① インストールは簡単

インストール方法は、モデム同様のインストールと、付属CD-ROMによる「STAセットアップ」の2つだ。モデムと同様にTAのインストールは、「コントロールパネル」の「モデム」の「プロパティ」で「追加」ボタンを押し、「ディスク使用」で付属CD-ROMのモデム設定ファイルを指定するやり方だ。モデム設定ファイルがCD-ROMの深い階層のフォルダーに収められているため、この部分はマニュアルを参照して作業したほうが良いだろう。また、「STAセットアップ」は、「setup.exe」を実行するだけでインストールできた。インストール作業自体は、可もなく不可もなしといったところだろう。なお、このCD-ROMには、「秀term」や「NIFTY Manager」などの通信ソフトからプロバイダーへのオンラインサインアッププログラムや、フリーソフトやシェアウェアが数多く収められていて便利だ。

② FTP転送速度テスト

ウィンドウズのFTPコマンドを使ったときに、どの程度の転送速度が得られるかを測定してみたことにした。測定には、500Kバイトのテキストファイルとバイナリーファイルを用意し、筆者の使っているリムネットのユーザーディレクトリーにFTPでファイルを転送して、その時間を5回ずつ測定した。テキストファイルは、LHAなどを使うとおおよそ半分まで圧縮できる程度の普通のテキストファイルで、一方のバイナリーファイルはすでに圧縮されたものだ。接続

には、64Kbps、128Kbps（DTE速度115.2Kbps）、128Kbps（DTE速度230.4Kbps）の3種類を用意した。128KbpsでDTE速度を2種類試したのは、シリアルポートが115.2Kbpsまでしか対応していない場合のスループットを確かめるためだ。なお、参考のために、MN128V3と、NECのAterm IT55でも同様のデータを測定した。

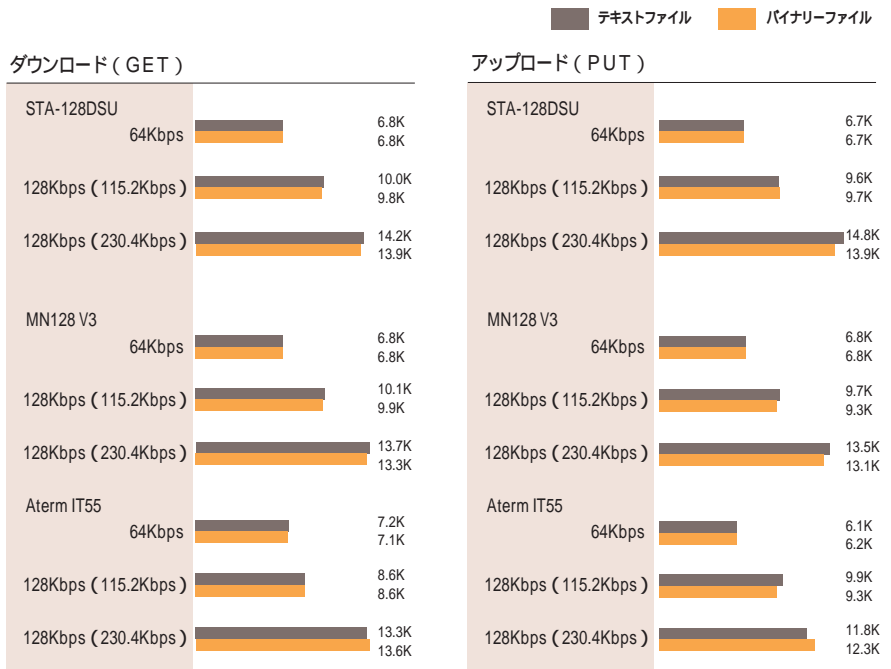
下のグラフがその測定結果だ。圧縮機能がないこともあり、テキストファイルとバイナリーファイルでの違いはまったくなかった。また、機種間の差もほとんど存在しないものの、64KbpsではAtermがわずかに速く、逆に128KbpsではSTA-128DSUとMN128V3が勝っている。MP（128Kbps）では、TA内でパケットを組み立て直すなどの重い処理があるため、TAに内蔵されているCPUパワーとファームウェアの影響を受けて速度に差が出ることもあるが、今回発売の新しいSTA-128DSUとMN128-V3が勝ったのも、その事情によるものだろう。いずれにしても、STA-128DSUの実力はMN128V3

と互角でなかなかのものだった。

③ ウィンドウズ98を前にUSB対応が課題か？

STA-128DSUは兄弟にあたるMN128-V3よりも小さな筐体で、しかもアナログ3ポートを持っている。性能面で人気の高いMN128-V3と互角のスペックを持つSTA-128DSUは、安心してすめられる高性能なTAだと言える。欲を言えば、ウィンドウズ98で標準サポートされるUSB（Universal Serial Bus：パソコンと、TAやスピーカーなどの周辺機器の接続に共通のインターフェイスを使用する規格）のサポートと、最近のTAでは主流になりつつある液晶モニターが欲しかった。（梅垣まさひろ）

FTPによるファイル転送速度（Kバイト/秒）



カッコ内の速度は使用したDTE速度。DTE230.4Kbpsのテストにはアイ・オー・データ社の高速RS-232C拡張ボード「RSA-DV11/S」を使用

10Base-T 端子を4つ搭載したダイヤルアップルーター NetVehicle-EX3

Check!

設定がWWWブラウザから簡単にできる
S/T端子がないので拡張性はイマイチか

発売元	富士通株式会社
価格	68,800円
問い合わせ	0120-89-4321
付属品	ISDNケーブル(クロス、ストレート各1本)、10Base-Tケーブル

URL

<http://www.fujitsu.co.jp/hypertext/Products/telecom/NV/>

ポディーサイズは280(幅)×45(高さ)×210(奥行き)ミリ。



背面左から、電源スイッチ、RS232Cポート、10BaseTの1ポートをカスケード接続用に変更するLANスイッチ、10Base-Tポート4つ、アナログポート2つ、ISDNポート、ALTスイッチ。

NetVehicleが機能アップして再登場した。この製品は低価格ダイヤルアップルーターとして普及したNetVehicle-Iの上位版だ。その改良点は、ハードウェア面はDSU、アナログポート装備、10Base-Tポートの増設、ソフトウェア面では「マルチNAT」機能により同時に複数のパソコンを端末型ダイヤルアップ接続でアクセスできるようになった。

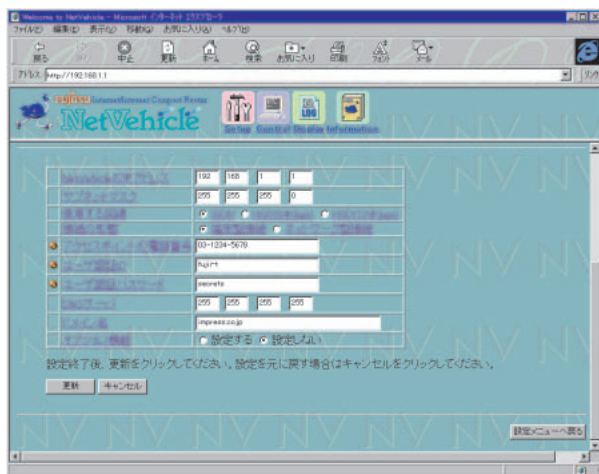
サポートプロトコルはTCP/IPのみ

NetVehicle-EX3はDSUとTAを内蔵したルーターで、INSネット64(ISDN)、OCN、デジタルアクセス64/128をサポートし、どれもISDNポート(U点インターフェイス、RJ-11)に接続する。INSネット64は、DSUに複数のTAやISDN機

器を接続できるものだが、NetVehicle-EX3はDSUとTAが内蔵され、DSUとTA間のインターフェイス(S/T点端子)をコネクタとして装備していない。そのため、この後ろに他のTAやISDNカード類を接続して使うことはできない。またサポートプロトコルはTCP/IPのみとなっている。このため、現在ウィンドウズでのRASやマッキントッシュでのARAなどV.110やV.120のプロトコルでの通信をTAで行っている場合、今までのTAが利用できなくなる。NetVehicle-EX3もこれらのプロトコルに対応した通信ができないので、導入そのものを考え直すことになる。また、PIAFSに対応したルーターやTAが増えるなか、PIAFSのサポートがないのはさびしい。

停電対策はなし

INSネット64を使ったダイヤルアップIPルーティングを行う場合には、アナログポートが使えるようになる。プッシュ式のアナログ機器をそれぞれのポートに1台ずつ、計2台設置できる。それぞれのポートにダイヤルイン番号、グローバル着信の可や不可、サブアドレス番号、発信者番号通知の可や不可、接続機器種別を設定するなど、基本的な機能は備えている。電話発信をするとき、発信ボタンを備えていないアナログ電話機で一定時間キー入力がないとダイヤル終了と認識して発信を開始するが、その時間を調整することができる。もちろん、即時に発信させるために発信ボタンの代わりとなる「#」を使うことも可能だ。その他、アナログポート間で



WWWブラウザ上での設定画面。これなら初心者でも安心だ。

の内線通話や内線転送が可能で、内線と外線では呼び出し音が異なっている。とはいえ、アナログポート機能は、TAが普及しはじめた初期のTAの必要最低限の機能しか持ち合わせていない。そして、停電時のバッテリーバックアップ機能がないため、アナログ機器は一切使えなくなる。

10Base-Tポートは4つ

10Base-Tポートを4つ搭載しているので、パソコンが複数台ある家庭では、4台までなら別にハブを用意しないで利用できるのが便利だ。また、背面のLANスイッチをDTEからHUBに変更すると、そのポートのみクロス配線に切り替わるので、通常使われる10Base-Tストレートケーブルのまま拡張するハブに接続できる。

INSテレホーダイに対応

NetVehicle-EX3は、同期64KbpsとMPの128Kbpsで接続でき、BOD機能によりデータ量に応じて接続するチャンネル数を増減する機能も持つ。これは、転送データの量に応じて使用するBチャンネルの本数を切り替える機能だ。このBOD機能によって、通信速度とコストのバランスがとれた利用ができるようになる。また、128Kbpsで通信中に電話やFAXがかかってくると自動的に2チャンネルから1チャンネルの接続に切り替わり、空いた1チャンネルで電話やFAXを受信する「リソースBOD機能」も装備されている。

インターネットの接続や切断は自動で行われ、目的のホームページのアドレスにアクセスするとダイヤルアップを開始し、一定時間通信が発生しないと回線は自動的に切断する。そのために、利用者はダイヤルアップの操作を意識することなく接続することができ、回線を切断する手間もない。

さらに、NetVehicleシリーズ独自の機能にINS(ISDN)テレホーダイ対応機能がある。INSテレホーダイの時間帯はインターネットに接続したままにする人が多いため、前述の「接続後に一定時間通信が発生しないと回線は切断する機能」を一時的に無効として接続し続ける機能で、INSテレホーダイ利用者には便利な機能といえるだろう。それとともに使える機能がINSマルチダイヤルだ。これは、プロバイダーのアクセスポイントの電話番号を3つまで登録し、つながらないときには順次かけ直していく機能だ。

そのため、INSテレホーダイの時間帯にいち早くアクセスポイントに接続し、一度手にした回線は切断しないという使い方ができる。また、マルチNAT機能もサポートしているため、1つのグローバルアドレスを複数のローカルアドレスに振り分けることができ、複数のコンピュータで同時にIP接続ができる。

試用レポート

① 設定はWWWブラウザから

NetVehicle-EX3の接続は簡単で、ISDNケーブルをつなぎ、パソコンと10Base-Tケーブルでつなぐだけで動作可能となる。WWWブラウザを起動して、http://192.168.1.1/(NetVehicle-EX3のIPアドレス初期値)にアクセスすれば、WWWブラウザ上で接続に関する設定ができる。「かんたん設定」では、プロバイダーのアクセスポイント電話番号、ID、パスワード、DNSサーバーアドレス、ドメイン名を入力し、更新ボタンをクリックするだけで設定は完了だ。あとはWWWブラウザで見たいページのURLを指定すればインターネットにアクセスできる。

② ファームウェアのバージョンアップも簡単

続いて複数のパソコンを接続し、同時にイン

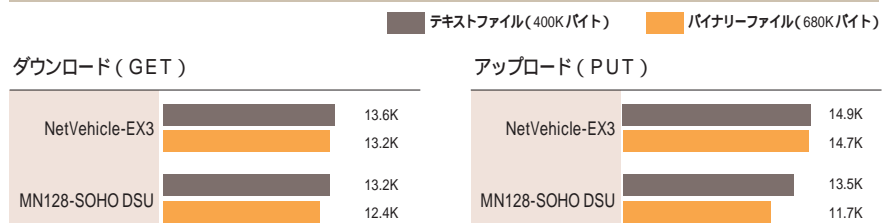
ターネットにアクセスしてみよう。NetVehicleの旧モデルでは不可能だった複数台の同時接続もEX3では可能だ。設定がWWWブラウザ上で行えるのは、今や小型ルーターでは一般的だが、NetVehicle-EX3はそれぞれの項目の設定が単純で、多くの設定が階層的にまとまっている。WWWブラウザ上の設定画面でボタンをクリックしていけば、メーカーのFTPサーバーにアクセスしてファームウェアのバージョンアップまで行える機能はビギナーにもやさしい。難解になりがちなIPフィルターの設定も単純化されている。このように順を追って設定を進めていく限りは、容易に設定ができるが、全体像を把握するには向かない。

③ S/T端子は装備してほしい

実際に使ってみると、アナログポートの機能不足や、停電対策がないあたりに不満が残る。将来の拡張性を気にするならば、価格や機能で競合するMN128-SOHO DSU(NTT-TE東京/ビー・ユー・ジー)のようにS/T端子を備えているほうがいいかもしれない。とはいえ、ダイヤルアップルーター入門者やすぐに4台までコンピュータがつけたい人にはちょうどよい製品だろう。

(菊地宏明)

FTPによるファイル転送速度(Kバイト/秒)



テスト状況 インターネットマガジン編集部のリモートアクセスサーバーに128Kbpsで接続し、FTPによるファイルの転送速度を測定した。クライアントマシンはペンティアム133MHzのウィンドウズ95マシンでメモリーは32Mバイト。

モバイルギアにウィンドウズCE タイプ登場

Mobile Gear (MC-CS12)

Check!

好評の各種モバイルギアソフトが使える
内蔵モデムは14.4 Kbpsで実用的でない

発売元	日本電気株式会社
価格	MC-CS12 : 89,000円 (メモリ8Mバイト) MC-CS11 : 73,000円 (メモリ4Mバイト)
問い合わせ	03-3798-2088
付属品	RS-232Cケーブル(9ピン)、単3 アルカリ乾電池2本、副電池1個、 モジュラーケーブル
URL	http://www.nec.co.jp/mg/



ポディーサイズは折り畳み時で175(幅)×27(高さ)×97(奥行き)ミリ。これまでのモバイルギアよりは一回り小さい。



本体左側面。左から、内蔵モデム端子、RS232C端子。モニター部分の左側面にはバックライトボタンがある。



本体右側面。左から、PCカードスロット、ACアダプター端子。

現在、日本語版ウィンドウズCEマシンはカシオのカシオペア、NECのモバイルギアが発売されている。特に、モバイルギア(MC-CS11/12)はモバイル用としてヒットしたMobile GearをウィンドウズCEベースにしたものだ。

モバイルギアとカシオペア

両者のスペックとしては、カシオペアは日立のSH3というRISC-CPUを採用している。一方、NEC

のモバイルギアはNECのVR4102というMIPS社のRISC-CPUを採用している。このため、ウィンドウズCEといえども、カシオペア用のアプリケーションが必ずモバイルギアで動作するわけではない。やはり、各社用に移植されたアプリケーションを購入する必要もある(移植に関しては、プログラムを各機種のマシン語にコンパイルするだけだ。このため、ほとんど手間はかからない)。

ウィンドウズCEでは、マイクロソフト社からワープロのPocket Word、表計算のPocket Excel、WWWブラウザのPocket Internet Explorer、電子メールの受信トレイ、カレンダー、アドレス帳など、とりあえずビジネスに必要なソフトはひと通り用意されている。

ウィンドウズ95/NTとのデータ連携も非常によく考えられている。Pocket WordなどのアプリケーションやウィンドウズCEの操作環境のエクプローラは、ウィンドウズ95/NTのIEやエクプローラ、Word97やExcel97とほとんど変わらない操作環境を実現している。また、受信トレイ、カレンダー、アドレス帳はOutlook97と互換性を持っている。このため、デスクトップパソコン側のデータをウィンドウズCEにダウンロードしてきたり、ウィンドウズCEでアップデートされたデータをチェックして、デ

スクトップパソコン側のデータもアップデートしたりすることができる。このように、パソコンとのデータ連携を重視してウィンドウズCEのアプリケーションは作られている。

ウィンドウズCEマシンを作っている各社は、マイクロソフト製のソフトだけでなく、独自のアプリケーションを内蔵している。モバイルギアMC-CS12では、好評を博していた従来タイプのモバイルギアで採用されていた電子メールソフト「MGメール」、FAXソフト「MGFAX」、パソコン通信ソフト「MGパソコン通信」などがインストールされている。これにより、ウィンドウズCEマシンでも従来のモバイルギアとの互換性を保っている。また、「MG運用アシスタント」を使えば、従来のモバイルギアとデータ交換が行える。

その他、カシオペアにしても、モバイルギアにしても、ボーナスCD-ROMが用意されている。このCD-ROMには、サードパーティーの体験版ソフトが入っている。これを各ウィンドウズCEマシンにインストールすれば、ゲームや地図などをウィンドウズCE上で使用することもできる。

試用レポート

① モバイルギアの使い勝手は?

モバイルギアを使うためには、ウィンドウズ95がインストールされたデスクトップのパソコンが必要になる。ボーナスバックCD-ROMのソフトをインストールするにも、デスクトップパソコンからダウンロードするようになっている。そしてデスクトップパソコンにインストールされる「ハンドヘルドPCエクプローラ」というソフトでコントロールすることになる。

デスクトップパソコンとの接続のためにはシリアル回線が必要で、モバイルギアでは専用の接続ケーブルが用意されている。また、IrDA(赤外線)ポートも用意されているため、ノートパソコンなどとの接続には、こちらを使うほうが

便利だ。

実際にデスクトップパソコンと接続しようと考えると、デスクトップパソコンのシリアル回線が2つとも（モデムとTAなどで）埋まっていることもある。いちいちケーブルを抜いてつなぎかえるのは面倒なので、デスクトップ機のシリアル回線を増設するか、シリアル回線の切り替えスイッチを使ったほうがいいだろう（スピードは19.2Kbpsと、あまり速くない）。このあたりは、将来的にイーサネットなどで高速化されると実用的なのだが...

もう1つデスクトップパソコンに用意しておくほうが便利なのは、Office 97 だろう。ウィンドウズCEでは、Pocket Word やPocket Excel などが入っているため、これらのアプリケーションを使うにはデスクトップ側にもWord 97 やExcel 97 が必要になる。さらに、電子メールやカレンダー、アドレス帳は、Outlook 97 と連携できるようにできている。このため、Office 97 があれば、ウィンドウズCEを便利に使えるようになるだろう。逆に、これがないとウィンドウズCEの魅力は半減する。

❶ PC カードスロットは1つ

モバイルギアの内蔵メモリーは、4M バイト（MC-CS11）と8M バイト（MC-CS12）の2種類のモデルが用意されており、市場では8M バイトのモデルが多く出回っている。しかし、メモリーが8M バイトあったとしても、ボーナスCD-ROM のソフトがすべてインストールできるわけではないことに注意したい。やはり、メモリーの少ないウィンドウズCEマシンでは、あまりアプリケーションをインストールすることはできない。さらに、Outlook などからアドレス帳のデータをダウンロードしてくるとなると、アプリケーションで使用できるメモリーも限られてくる。多くのデータを入れて、いろいろなアプリケーションを積み重ねたいなら、メモリーカードは必須だ。モバイルギアには、カシオペアのようにコンパクトメモリーカードスロットがないため、PC カードスロットを使わなければならない。しかしPC カードスロットは1つしかないため、ここにメモリーカードを入れると、他のPC カードが使えなくなる。ここでは、PC カードの拡張性を活かすことができない。

❷ 14.4 Kbps の内蔵モデムは物足りない

FAX/モデムを標準で内蔵しているのは嬉しい。これにより、PC カードスロットにFAX/モデムカードを差さなくても通信が行える。ただ

し、このFAX/モデムの通信速度は14.4Kbpsなので、電子メールの送受信には堪えられるが、ウェブページを見るにはかなりキビシイ。せめて28.8Kbpsは欲しかったところだ。また、PC カードスロットが1つしかないため、PIAFS モデムやメモリーカードなどのPC カードを同時に使うことができない。

さらに、気になるのは、モデムを内蔵したことによるバッテリーの消耗度だ。モデムを使用しなければ、40時間ほどもつようだが、通信時は6時間しかもたなかった（また、PIAFS 用カード使用時は1時間しかもたなかった）。これでは、1日のうち何度か電子メールをチェックするとすると、1週間くらいで乾電池はなくなってしまう。確かに、充電池も用意されているため、会社や家に戻って充電すればいいのだが、使い勝手を考えれば、1か月くらいは乾電池で使えるほうがいいだろう。

文字入力、キーボードとペンから行える。ペン入力のほうが使いやすいように思えるが、実際に使ってみると文字認識に時間がかかり、また液晶画面にペンで文字を書くのが書きにくくて使いにくかった（特に、画数の多い文字を書くとうまく認識できない）。やはり、キーボードから文字を入力するほうが使いやすいのかもしれない。

❸ CEの本領発揮は2.0からか？

モバイルギアは「ウィンドウズCEマシンとしては」そつなくまとまっているハードウェアだろう。しかし、なにしろ動作が遅く、ひと昔前の携帯電話くらいの大きさは、ポケットの中に入れて持ち歩くのはつらい。やはり、モバイルということと、動作の遅さ、メインの作業はデスクトップにまかせることを考えて、もう少し機能を削って、もっとコンパクトにしたほうがよかったのではないか？

現在、マイクロソフト社ではウィンドウズCE 2.0の開発を進めている。東芝やシャープなどでは、ウィンドウズCE 2.0から、ウィンドウズCEマシンをリリースしようと考えている。ウィンドウズCE 2.0ではカラー化し、コンパクトなPIM 端末にできるようにしているようだ。これは、OS部分をコンパクトに作り、さまざまな機能はモジュールとして提供する。これにより、ウィンドウズCEをベースとしたさまざまな携帯端末を作り上げることができる。このように考えると、ウィンドウズCEが本格的に普及するのはウィンドウズCE 2.0からになるのかもしれない。

（山本雅史）



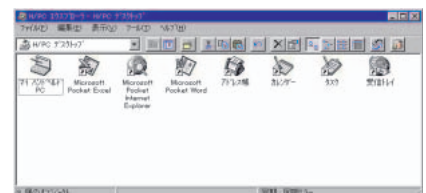
スタートメニュー内の「プログラム」フォルダーには、「MG」で始まるモバイルギア専用ソフトがいくつもある。



従来型モバイルギアと連携するためのユーティリティソフト、「MG運用アシスタント」内のメニュー。



「MGメール」のメールボックス（サンプル）に受信したメールのリストを見たところ。



ウィンドウズ95マシン上の「H/PC エクスプローラ」からは、MC-CS12のデスクトップがこのように見える。



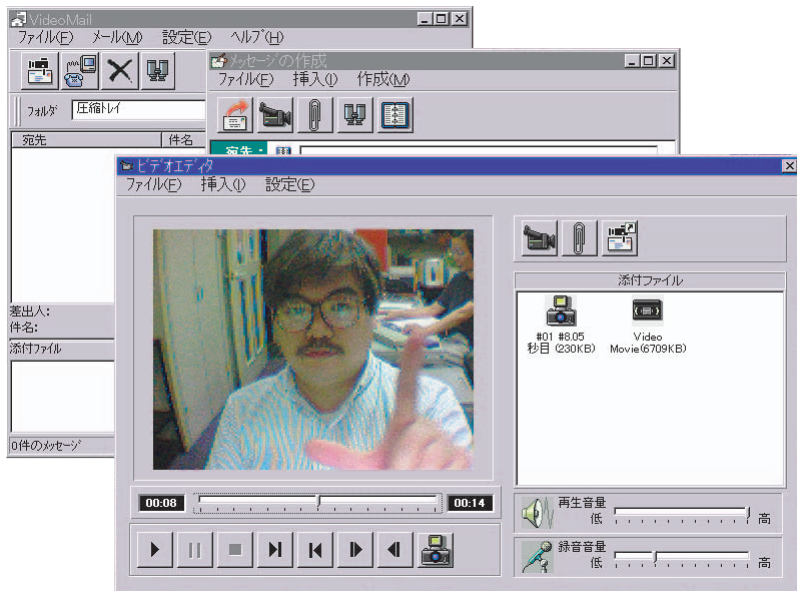
発売元	マップジャパン株式会社
価格	14,800円(カメラ、ヘッドセット付は29,800円。キャプチャーカード、カメラ、ヘッドセット付きは49,800円)
問い合わせ	03-3363-5570
対応機種	ウィンドウズ95マシン(ペンティアム133MHZ以上を推奨)
URL	http://www.mapjapan.co.jp/

動画を送れる「電子メール送信ソフト」

Quality Motion Video Mail

Check!

動画 & 音声の添付に特化
Quality Motion エンコーダーにもなる



ファイル添付をサポートする電子メールソフトは多いが、このVideo Mailは、撮影したビデオの画像を電子メールに添付して送ることができるソフトだ。

動画 & 音声を送れる!

Video Mailは、KDDが開発したビデオデータ圧縮技術「Quality Motion(以下QM)」を使って動画データをコンパクトなサイズに圧縮して送信する電子メールソフトだ。RAM16Mバイト以上、ハードディスク100Mバイト以上、ペンティアム搭載で、ビデオキャプチャー装置を備えたウィンドウズ95マシンで使用する。ビデオカメラの画像とマイクからの音声を、ビデオエディターで記録や再生をすることができる。記録する画像サイズは標準160×120、倍サイズで320×240となる。映像はAVI形式で保存され、電子メールに添付する。送信メールの作成が終了し、送信ボタンをクリックすると送信準備が開始され、電子メールに添付されたAVI形式の画像ファイルはQM形式に圧縮される。圧縮率は「サイズ重視(画像サイズ160×120

のみサポートで1/50～1/500)」、「標準(1/10～1/200)」、「画質重視(1/6～1/100)」の3段階から選択する。圧縮されたデータは送信トレイに蓄積され、ネットワークの接続環境を整えた後、接続ボタンをクリックしてメールを送信する。メールサイズを抑えるオプションを指定すると、50Kバイト単位で複数のメールに分割することもできる。

試用レポート

①映像 & 音声に特化した「送信専用ソフト」

実際に動作させるためには、ビデオや音声の記録に十分なメモリーとハードディスクが必要だ。QMでは1分間の画像と音声を300Kバイトまで圧縮するとなっているが、事前にAVIファイルを作成するためには、多量のメモリーとハードディスクを使用する。また、すでにあるAVIファイルをQM形式に変換して添付したメールを作成しようとしても、変換時にエラーを起こしてしまう。Video Mailで録画された映像

でないQM形式に変換されないようだ。

変換された後に、接続ボタンでSMTPサーバーにファイルを送信することになる。設定でDNSの指定があるのだが、この設定はコントロールパネルのネットワークで指定する値と同じである。同じことを再度設定させるのは面倒であり、設定に食い違いが生じたら誤動作する原因となり得るので、この仕様は修正してほしい。Video Mailで作成されたメールは受け取った側にビューアーがなければ再生することはできないが、メール送信時にビューアーを添付するボタンが付いており、ビューアーも一緒に添付することができる。ただし、ビューアーはウィンドウズ版なので、マッキントッシュでは利用できない。KDDのホームページ(<http://www.kdd.co.jp/>)ではマッキントッシュ版のビューアーもダウンロードできる。

また、電子メールの送信機能だけに割り切っているのも、着信を中心としたメールソフトと併用することになる。これまで使い慣れた電子メールソフトを乗り換えることに抵抗がある人は多いと思われるので、Video Mailをフルセットのメールソフトにしていけないのは利点でもあるが、アドレス帳データの二重化、返信などの送受信を連携させた機能が使えないなどの欠点も生じてしまう。

②動画をホームページの素材として使う

ビデオメールは、工夫すると面白い使い方ができる。汎用的にAVIファイルをQMファイルに変換することはできないが、ビデオ入力でキャプチャリングした画像をQMファイルに変換することは可能だ。メールに添付する画像を作成する手順で作業し、データがQM形式に変換されたら、そのファイルを取り出せばよい。このデータを自分のホームページに使うこともできる。このように、簡単なQMファイル作成ツールとして使うのはどうだろう。

(菊地宏明)

声で入力&操作できるメールソフト

しゃべっていいメール Ver1.0



Check!

音声で入力や操作ができる
楽しいが実用には向かない

なんと音声で入力&操作したり、読み上げさせたりできる電子メールソフトが発売された。その名も「しゃべっていいメール」。ネーミングもユニークだが、使ってみるとこれまた面白いメールソフトなのだ。夜中に、なにやらぶつぶつとパソコンに向かって話かける、ちょっと怖い人になってしまいそう。

音声は入力と操作

この「しゃべっていいメール」に付いてくるのは、CD-ROMと説明書、それにヘッドセットだ。音声認識は、標準のサウンドボードとソフトウェアだけで処理してしまうという手軽なソフトだ。実際に音声で行えるのは、ボタンなどの操作と、メールを作成する画面での文章の編集だ。大きな絵のアイコンの「」のあとに書かれている文字を読み上げればそのボタンを押したのと同じになる。キーボードがとことん嫌いな超初心者ユーザーでも、大まかな部分が音声だけで操作可能だ。「ここをさくじょ」で文字を削除したり、「ここをこびー」「ここにはりつけ」なんてやれば、コピー&ペーストも音声だけでできて面白い。もちろん、キーボードと併用すればよりスムーズな入力ができる。また、届いたメールを音声で読み上げてくれる機能もある。

画像が扱えるメールソフト

音声が使えらる以外に、この「しゃべっていいメール」はHTMLメールにも対応している。HTMLメールは、URLを指定したリンク情報をメールに盛り込むこともでき、クリックすればブラウザを立ち上げなくても、当該ページが表示されるという便利さだ。文字の大きさや色を変えたり、付属のイラスト集から画像を貼り付けることも可能だし、パソコンにビデオキャプチャー機能があれば、ビデオ静止画を取り込んで貼り付けることもできる。

試用レポート

① 認識率を上げるコツは

最初にテストしたときはとにかく認識率が低すぎて、とても実用レベルにはならないと感じ

たのだが、その後いろいろとやってみると、いくつかコツがあることが分かってきた。まず、入力レベルの設定とマイクのセッティングだ。入力レベルをシピアに調整し、マイクもヘッドセットで一定の距離を保つようにしたら、認識率が飛躍的に向上した。利用者の声の特徴を学習する「話者学習」もきちんと調整してから使ったほうがいい。発音も単語ごとに区切って、一定の速度で音声入力すればすんなり入力が進む。

画面は実際に音声入力で作成したものだが、「しゃべって」が、何度入力しても「調べて」になってしまった。その後傾向をつかんでからは、認識しやすいような単語や言い回しを選んでしまうという行動に出たら回避できた。なお、不思議なことに「メールを読む」などの操作系のコマンドは、かなりいいかげんな発音でも、問題なく動く。

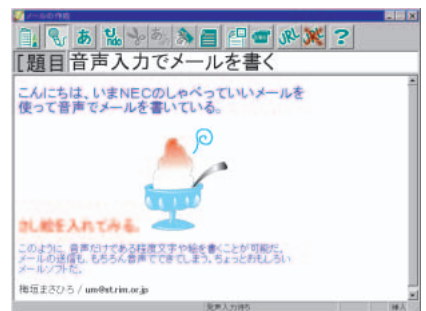
② 遊べるメールソフト

ウェブを見るのに飽きてきて、そろそろメールで遊んでみたいけど何だかどうも難しそう、と躊躇している若業マークユーザーはけっこう大勢いるはずだ。そんな人のための入門用として、こんなメールソフトを使ってみたらどうだろう。特定の相手との画像を交えた楽しいメール交換で、インターネットメールを使いこなす第一歩が踏み出せるのではないだろうか？ 音声入力も、マジにならないで、未来のパソコンを先取りしたつもりの遊び感覚で使ってほしい。

発売元	日本電気株式会社
価格	4,800円 (ヘッドセットマイク付き9,800円)
問い合わせ	0120-60-9821
対応機種	ウィンドウズ95マシン(ペンティア Δ133MHz以上を推奨)
URL	http://www.psinfo.nec.co.jp/mm/shabette/



HTMLメールをサポートしているので、文字の大きさやフォントを変えることができる。画像の貼り付けも簡単。

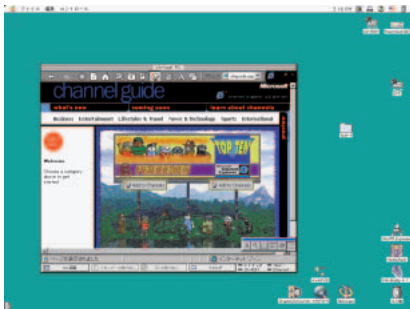


音声でメールを作成してみた。画像の貼り付けも音声による操作ができる。

1つだけ苦言。せっかく名前が「しゃべっていいメール」なんだから、音声のメールが送れる機能が欲しかった。そしたらこの原稿も、しゃべって送れたのに…。残念。

(梅垣まさひろ)

発売元	株式会社システムソフト
価格	39,800円
問い合わせ	092-752-5264
対応機種	PowerPC 603e/180MHz以上、漢字Talk7.5.5、Mac OS 7.6以上、22Mバイト以上の空きメモリー、150Mバイト以上の空きHD容量
URL	http://www.systemsoft.co.jp/



バーチャルPCでアクティブデスクトップを使う。シェル統合をバーチャルPCで試すが、速度が遅いだけですね。なりと動作した。

バーチャルPCはマッキントッシュでDOS/Vマシンをエミュレートするユーティリティソフトで、アプリケーションソフトとして、DOS/Vマシンを仮想的に作り上げる。パッケージには、ウィンドウズ95日本語版が同梱され、マッキントッシュ上でウィンドウズ95対応ソフトが動作する環境が構築できる。

ソフトウェアでウィンドウズ環境を構築
ハードディスク容量、メモリー容量、CPUのクロックについては、動作させるマッキントッシュ環境に依存する。バーチャルPCでは、マッキントッシュのファイルシステム上にウィンドウズ環境用のハードディスクのイメージファイルが作られ、これがハードディスクとして使われる。ウィンドウズ環境用のメインメモリーは、バーチャルPCのアプリケーションに割り当てたメモリーサイズで決まる。ウィンドウズ環境のメインメモリーは最大64Mバイトで、それ以上割り当てても使われない。また、CPUはソフトウェアで作り上げられ、PowerMacの処理速度に依存したパフォーマンスを発揮するため、高速に動作させるにはPowerMacに高い処理能力が要求される。そのため、PowerPC 603e/180MHz以上が必要で、PowerPC 604が推奨されている。

試用レポート

① IEの「アクティブチャンネル」も動く
インストールはきわめて簡単で、付属のイン

マッキントッシュでウィンドウズが動く！

VIRTUAL PC

Check!

ウィンドウズの最新ソフトが動く
ウィンドウズ環境の処理速度は遅い



バーチャルPCの動作環境の確認画面。アプリケーションに割り当てたメモリーサイズはメモリー情報の合計と同じだ。

ストーラ - で組み込むだけだ。アプリケーションを起動させると、大きなウィンドウが現れ、そこに数分かってウィンドウ95が立ち上がる。実際の操作で問題になるのがマウスボタンで、左ボタンはそのままマウスボタンを使うが、右ボタンはシフトキーを押しながらマウスボタンをクリックすることで代用できる。ウィンドウズ版のCD-ROMやフロッピーも挿入するとそのまま使える。

では、ウィンドウズのアプリケーションを動かしてみよう。おなじみのエクセルやワードも動く。インターネットも問題ない。DHCPを使ったTCP/IP設定のLAN接続で動作していたマッキントッシュでは、なんの設定もすることなくいきなりインターネットに接続できた。ダイヤルアップ接続の場合は、バーチャルPCの初期設定のCOM1かCOM2のポートをマッキントッシュのシリアルポートに関連付けてからウィンドウズのダイヤルアップ設定をすればよい。最近話題になっているウィンドウズ版インターネットエクスプローラの「アクティブデスクトップ」や「アクティブチャンネル」も動作する。共有フォルダー機能を利用すれば、ファイルをマッキントッシュとウィンドウズで相互利用が行える。さらに、マッキントッシュで利用するプリンターがウィンドウズでも利用できる機能は、とても役に立つ。

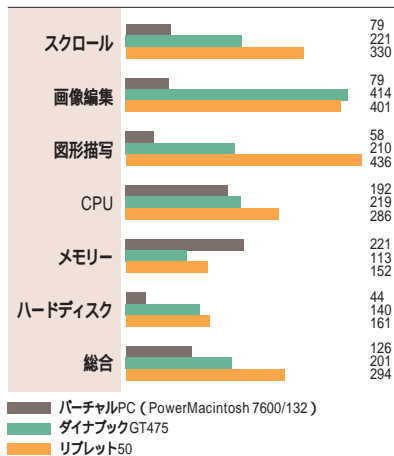
① ウィンドウズCEとの接続もOK
バーチャルPCをインストールしたマッキントッシュが、ウィンドウズマシンとしての程度の処理能力を発揮するのかをテストしてみよう。

メルコ社のベンチマークソフトを使って行ったベンチマークでは、バーチャルPCをインストールしたPowerMacintosh7600/132 (PowerPC 604e/132MHz、96Mバイト) を用意して、2台のウィンドウズマシン、東芝ダイナブックGT475 (DX4/75MHz、32Mバイト) と東芝リブレット50 (ペンティアム75MHz、32Mバイト) と比較した。CPUの速度だけならDX4に肉薄する結果が出た。PPC604eのクロック速度が200MHzなら、DX4の100MHz以上の能力が出るだろう。しかし、画像を扱うにはかなりつらいようだ。

バーチャルPCではウィンドウズCE用ソフトのインストールやデータの同期もできるのでCEユーザーにもおすすめだ。ただし、接続ケーブル類はコネクタ形状をマッキントッシュに変換する必要がある。

最近ではインターネット関連の最新ソフトやプラグインはウィンドウズ先行でリリースされるが、最新ソフトをいち早く体験したい人も楽しめるだろう。価格はソフト1本分でも、ウィンドウズマシンを1台買うような気でないといえいなせう。宝の持ち腐れとなってしまふ。これは侮れないソフトだ。 (菊地宏明)

メルコ社のベンチマークソフトで測定したバーチャルPCの処理能力 (数値が大きいほどよい)





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp